

Title	福沢諭吉関係新資料紹介
Sub Title	Letters and memorandum by Yukichi Fukuzawa : latest findings
Author	福沢研究センター(Fukuzawa kenkyu senta)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2007
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.24, (2007. ) ,p.329- 335
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20070000-0329">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20070000-0329</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 福沢諭吉関係新資料紹介

福沢研究センター

### I 福沢諭吉書簡

『福沢諭吉書簡集』（岩波書店 平成十三～十五年 以下『書簡集』と略す）未掲載で、『近代日本研究』第二十三卷刊行以降見出された書簡を載録する。発信年月日順とし、体裁はすべて『書簡集』の形式に従った。主な原則は次の通りであるが、詳しくは『書簡集』第一巻所収の凡例を参照されたい。なお、書簡番号は『書簡集』の番号を追うものである。

#### 凡例

一、常用漢字、人名漢字は、原則としてその字体を用いたが、慶應義塾など若干の固有名詞には、原文の字体

を残した場合もある。

二、異体字、俗字、或いは書き誤りかと思われる文字は、正体に直した。

三、仮名づかいは、原則として原文のままとした。ただしひら仮名・かた仮名の判別がつかない文字は、かた仮名字体で表記した。

四、変体仮名はひら仮名に改めたが、助詞として用いられている次の文字は、原文の字形を残し、小活字右寄せで印刷した。は（む）、て（而）、え（ゑ）

原本が確認できない書簡の場合も、漢字の字体で表記されている「者」「而」「江」が助詞として使われている場合には、右の字体を用いた。

五、濁点・半濁点は原文のままとした。

六、合字は、使用頻度の高いか（より）、ゞ（しめ）は原文の字形を残した。頻度の低い卍はトキ、卍はトモ、「」はことと表記した。

七、原本では句読点はほとんど打たれていないが、編者の判断により適宜これを補った。

八、発信年月日が推定でしか示すことができないものには、「カ」を付した。

九、本文の後に【】を付して書簡の大意を示した。

十、封筒に関する事項は、書簡の理解に必要と判断されるもののみに限った。

（西沢 直子）

二五三 神津国助 明治二十二年三月十二日

本月九日之貴翰拜誦、時下漸く春暄を催し候処、愈御清安奉慶賀候。陳ハ議員撰挙之義ニ付云々、い才拝承聞合せも可致候得共、何ハ扱置一度御出京ハ如何哉。東京之事情ハ復タ三、五年前之東京ニあらず、色々御話も可致、又御通覧も可被成、兎ニ角ニ御出掛可然奉存候。官海之模様も決して今日之有様を当テニすへからず、意外之變動を催ほすこともあらん。凡そ此種之事ハ筆端之尽すへきニあらされバ、一、二週間を費し御出府相成候様、呉々も所祈候。右拝報まで申上度、早々頓首。

三月十二日

論 吉

神津賢契几下

尚以、令兄にも久々御目ニ掛らず、御序之節宜敷御致意奉願候。以上。

【東京の事情を見聞し政官界の変化について談話するため上京を促す】

〔封筒裏〕 信州北佐久郡志賀村 神津国助様 親展 〔封筒裏〕 封 東京三田 福沢論吉出

○神津国助は長野県の豪農神津家（黒壁家）の十九代目当主吉助の末弟。明治七（一八七四）年三月入塾、同十一年卒業。『書簡集』第二卷（ひと）。○「議員撰挙」は明治二十二年の大日本帝国憲法発布を受けて翌年行われる総撰挙のことか。○「令兄」は神津吉助。○発信年月日は消印および文面による。○神津家蔵。

二五四 中村道太 明治二十八年二月一日

廿九日之華翰、昨日交詢社ニ而拜見仕候。中上川へ云々之一条ニ付御話も御座候由、小生義ハ毎日交詢へ参ると申訳ニも無御座候得共、参れば参る丈け何か用事あるゆゑ、何日何時参候而も不苦。既ニ今日も午後一時頃より出掛けて四時半を或処へ参る積り、明日も午後ハ参候事ニ可相成、或ハ午前なれと拙宅へ御来訪被下候而御話可仕、又或ハ午後五時頃を私方へ御出被下夜分ニ掛けて寛話も亦妙ならん。何れニ致しても其日と時とさへ御一報被下候得も、私方ニ差支ハ無御座候。右拜報まで申上度、勿々如此御座候。頓首。

二十八年二月一日

論 吉

中村様

【中上川への話の件などについて面会の日程を相談する】

○中村道太は福沢と幕末から交流のあった人物。横浜正金銀行の初代頭取、東京米商会所でも頭取を務める。『書簡集』第二卷(ひと)。明治二十四(一八九一)年の米商会所・第六銀行の営業停止後は隠遁生活を送っていた。○「中上川」は中上川彦次郎。福沢の甥。悪化した三井銀行の経営立て直しに活躍した。第二卷(ひと)。○「中上川へ云々之一条」は前回の面会の際に中村から依頼された中上川の説得のこと。詳細は不明。書簡(九二)、(九三)は関連書簡。

二五九五 丸 善

年未詳六月五日

モト大坂堂島中津屋敷内

大島為右衛門妻

右老婦人当時別紙之尼寺ニあり。両三日中当御店へ尋可被参ニ付別封物入御渡し被下度、尚御伝言も宜敷奉願候。

六月五日

丸善様

福沢論吉

〔別封〕のし 金三円 大島 (老) 御家内様 福沢論吉

【大島為右衛門の妻なかへお礼の品を渡すことを依頼する】

○「丸善」は丸屋商社の大坂支店丸屋善藏店のこと。○「モト大坂堂嶋中津屋敷」は大坂堂島にあった中津藩の蔵屋敷。福沢の生誕地。○「大島為右衛門」は中津藩士で、堂島の中津藩蔵屋敷内に居を構えていたと考えられる。「妻」はなか。○若い頃と思われる文字の様子や大阪を訪れている時期から、発信年は明治五（一八七二）年の可能性が高い。○詳細は西沢直子「福沢論吉と乳母」新資料丸善宛福沢書簡―（『福沢手帖』一三六、二〇〇八年三月刊行）参照。○福田充利氏所蔵。

---

以下の書簡は、『書簡集』掲載時には原本との校訂ができず、やむなく『福沢論吉全集』（岩波書店、昭和四十四～四十六年）から採録したが、このほど原本が判明し校訂作業を行うことができた。注についてはそれぞれ『書簡集』の各頁を参照されたい。

---

二七 福沢捨次郎 明治二十年六月二十九日

五月二十八日ポーキプシー発之来書相達し披見致候。学校之試験も終りポーキプシーニ至り一太郎へ面会、桃介へも同断、桃介ハ活潑にて初対面か気二叶ひ候よし、承わりて満足致し候。随分元氣よき少年ニ而、本塾ニ而も餓鬼大将と申したる人物なり。

時事新報ハ本月二十四日発行を停止せられたり。是れハ昨今政府中ニ而改正困難なれハ中止するニ若かすと云ふ議論ある其内幕を知らずして、新報が国権を棄て、改正ハ宜しからずと云ふ意味ニ而立論したるゆゑ、改正主張之向ニ甚しく応へて停止と出掛けたりとの事なり。

中上川ハ小供太郎一が病氣ニ而神戸行大ニ延引之処、病人も快方ニ付、本月二十二日出発ニ付而も、山陽鉄道も次第ニ着手之運びニ相成候事と存し候。

桃介ハ生糸商ニしてハ如何。一太郎と相談被致度、今便当人にも一書遣す積りなり。右ハ要用而已。早々不一。

二十年六月廿九日

諭 吉

捨次郎 殿

【『書簡集』第五卷二二五—二二六頁】

## II 福沢諭吉自筆命名書

明治二十七年

十二月十五日午後九時誕生

於信<sup>のち</sup>

六十一翁

福沢諭吉選

小泉信は明治二十(一八八七)年十月から二十三年三月まで慶應義塾長を務めた小泉信吉の三女で、やはり昭和八(一九三三)年十一月から二十二年一月まで慶應義塾長を務めた小泉信三の妹。父である信吉が亡くなって一週間目に誕生した。